

〔泌尿紀要5巻1号〕
〔昭和34年1月〕

不完全重複尿道の1例

大阪大学医学部泌尿器科教室（主任 楠 隆光教授）

大学院学生 柏 井 浩 三

研 究 生 丸 毛 博 昭

A Case of Incomplete Double Urethra

Kōzō KASHIWA and Hiroaki MARUMO

From the Department of Urology, Osaka University Medical School

(Director : Prof. Dr. T. Kusunoki)

A case of incomplete duplication of male urethra is reported. It was encountered in a 26-years-old man. The accessory urethra begins at an orifice which is located dorsal to the normal urethral meatus and runs parallel to the normal urethra to terminate blindly near the pelvic floor.

The literature is reviewed for cases of the double urethra and some aspects of the double urethra are discussed.

不完全重複尿道は、1954年に近藤賢が本邦症例だけでも215例を集め得ている如く、今日では左程珍しいものではない。最近私はその1例を経験したが、これは我々の教室では最初の症例であり、また不完全とは言いながら殆んど正常尿道の全長に達する長いものであるので、ここに報告する。

症 例

患者：26才の男子，職業は会社員。

初診：昭和33年1月6日。

家族歴及び既往歴：特記すべきものはない。

主訴：異常外尿道口が存在。

現病歴：生来亀頭中央部に外尿道口とは別に、やや小さいが第二の外尿道口を思わせる開口部の存在に気付いていた。しかし、排尿時には正常位置にある尿道口のみから尿排出があり、背側のものからの排尿は全くみられていない。排尿回数は正常で、尿失禁はない。尚射精も同様に腹側の正常外尿道口からのみ行われる。

現症：腹部は平坦で軟かく、視診及び触診では異常を認めない。又鼠径部及び膀胱部にも異常はない。陰莖は正常大で異常弯曲はないが、亀頭には正常外尿道

口の他に、それより正中線上約1.5 cm 背側にもう一つの外尿道口と思われるものが存在する(第1図)。ここから尿管カテーテルを挿入すると、約11 cmの盲管である事が予想された。

陰囊は外見正常で、左右の睪丸及び副睪丸にも異常所見はなかった。

膀胱鏡所見：膀胱鏡は亀頭先端の正常外尿道口から容易に挿入出来た。膀胱壁及び膀胱頸部には何ら異常を認めなかった。

レ線所見：経静脈腎盂レ線像では何らの異常を認めなかった。

尿管のカテーテルを挿入した副尿道のレ線像(第2図)及び更に正常外尿道口から40%モリョドール40ccを注入して得た尿道レ線像(第3図)の所見から、この盲管は副尿道であり、正常尿道の背側を平行に走って、骨盤底部附近に終っている事が判明した。

診断：不完全重複尿道

治療：患者は尿道口が2つ存在すると云う以外何の苦痛も訴えていないので、これを放置する事にした。

考 按

重複尿道に就ては近藤賢が詳細な綜説を発表しているから、ここには重複を避けて、私は主としてその後の諸家の報告をまとめて、本症に

就て二、三の考按を試みて見よう。

(1) 男子の完全重複尿道に就ては、1950年に Gross and Moore が19例を集めて報告しているが、1957年に Wrenn and Michie はその後の Slotkin and Mercer (1953), Arnold and Kaylor (1953) 及び Funfack (1953) の各1例に自己の1症例を加えて23例の報告があるとしているが、それに近藤賢の症例を加えると、現今その報告総数は24例となる。

(2) 男子の不完全重複尿道に関しては、その報告例を教えるには既に余りに多いのが現状である。そのうちで約85%以上のものは、副尿道が正常尿道の背側を走るものである。この点で私の症例は最も普通の型であるが、その長さが11 cm に及んだと云う点ではやや珍しい症例である。本邦例に就て見ると、盲管の長さが9 cm. 以上に及んだのは尼ヶ崎の1例、志賀土田の2例及び中内・藤井の1例で、総数4例にすぎない。

(3) 重複尿道に関しては、古くは Chauvin (1927) の分類があり、最近では近藤賢の分類がある。しかし、彼等の述べていない二、三の点を拾つて見よう。

(a) 重複膀胱に合併した重複尿道

Satter and Mossman (1958) は女子に見られた1例の重複膀胱兼尿道の報告に際して、それが第12例目である事を述べている。

(b) 結腸・膀胱・尿道の重複

完全重複尿道はまた所謂 Hind gut duplication 重複結腸に合併して見られる。Ravitch (1953) は4才6ヶ月の男児に見られた盲腸以下の結腸の重複に膀胱及び尿道の重複を合併した1例の報告の際に、この様な畸形は文献に20例あると述べている。その後 Bowie, Garvey, Boyce and Pantler (1954) が報告している症例もこの種類のものである。

(c) 女子の完全重複尿道

女子尿道は男子の精阜以上の尿道にすぎないから、重複尿道は極めて稀なものである。

1949年に DeNicola and McCartney は女

子の完全重複尿道の1例報告の際に、その症例が Dannreuther (1923) の1例に次いで第2例であること、及び不完全重複尿道の4例の報告を数え得る事を述べている。既に述べた Satter and Mossman (1958) の症例も女子の1例である。

(d) 重複尿道の分類は、上記のものを入れて、次の如くすべきである。

1. 男子の重複尿道

A. 重複陰茎のもの

B. 単一陰茎のもの

1) 完全重複尿道

2) 不完全重複尿道

2. 女子の重複尿道

1) 完全重複尿道

2) 不完全重複尿道

2. 複雑な畸形を合併するもの

1) 重複膀胱兼重複尿道

2) 重複結腸・膀胱・尿道 (Hind gut duplication)

結 語

(1) 26才男子にみられた不完全重複尿道の1例を報告した。副尿道は正常尿道の背側を平行に走り、骨盤底部附近で盲管に終るもので、全長約11 cm. であつた。

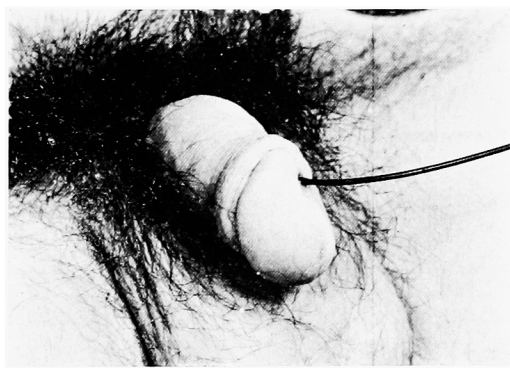
(2) 重複尿道に関して、近藤賢の綜説に二、三の点を補足した。

稿を終えるに当たり、本報告につき終始御懇篤なる御指導並びに御校閲を賜つた恩師楠教授に深甚なる謝意を表します。

文 献

- 1) 尼ヶ崎正雄：皮泌誌，**31**：1057, 1931.
- 2) Arnold, M. W. and Kaylor, W. M. : J. Urol., **70** 746, 1953.
- 3) Bowie, C. W., Garvey, F. K., Boyce, W. H. and Pantler, E. E. : J. Urol., **71** 293, 1954.
- 4) Chauvin, E. : J. d'Urol., **23** 289, 1927.
- 5) Dannreuther, W. T. : J. A. M. A., **81** 1016, 1923.
- 6) DeNicola, R.R. and McCartney, R. C.

- J. Urol., **61** : 1065, 1949.
- 7) Funck, M. : Z. Urol., **46** : 391, 1953.
- 8) Gross, R. E. and Moore, T. C. Arch. Surg., **60** : 749, 1950.
- 9) 近藤賢 : 外科, **2** : 185, 1954.
- 10) 中内義夫・藤井信雄 : 日泌尿会誌, **32** : 444, 1942.
- 11) Ravitch, M. M. : Ann. Surg., **137** : 588, 1953.
- 12) Ravitch, M. M. and Scott, W.W. : Surg., **34** : 843, 1953.
- 13) Satter, E. J. and Mossman, H. W. J. Urol., **79** : 274, 1958.
- 14) 志賀亮・土田梯三郎 : 皮泌誌, **34** : 24, 1933.
- 15) Slotkin, E. A. and Mercer, A. : J. Urol., **70** : 743, 1953.
- 16) Wrenn, E. L.Jr. and Michie, A. J. : Ann. Surg., **145** : 119, 1957.



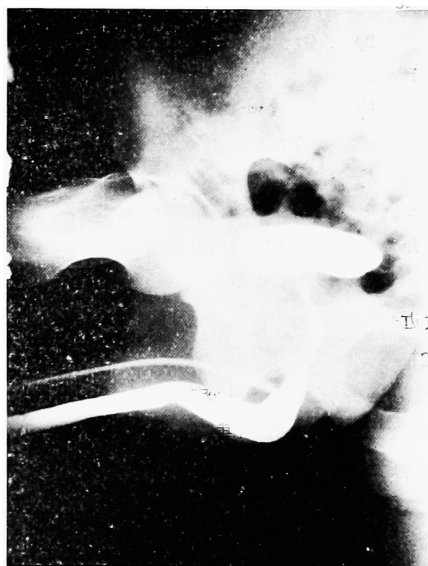
第1図

背側にある副尿道外口より尿管カテーテルを挿入したところ



第2図

副尿道のレ線像, 尿管カテーテル挿入



第3図

尿道レ線像, 副尿道は正常尿道と平行に走り, 骨盤底部附近で盲管に終わっている